施工者に幸あれ 第36回

「川口健一」の救命ミッション

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■IASS 2016 TOKYO

ブラジリアと東京間は，34時間の長旅になる。IASS（シェルと空間構造に関する国際会議）から帰国されたばかりの，川口健一教授（東京大学生産技術研究所）は，いつもの爽やかな笑顔で研究室。各国の研究者が，大空間建築の最新情報を交換し，これからの建築に活かすのがこの学会の趣旨という。2016年のIASSの東京開催が決まって，活動を開始されている川口副会長。葛飾北斎のinvitationカードは，海外でウケそうですね。

■天井は落ちる

川口教授が出演した，NHK「クローズアップ現代」を見た。地震に限らず，天井は落ちる。落ちても命は守りたい。地震に対して補強すると，天井は重くなり，目的にしたはずの安全性から，逆に離れていくという結果を生む。だから，「天井は軽く！」を主張する。阪神・淡路大震災は朝方だったので，公共ホールなどでの天井落下による被害が少なかった。が，教授自ら視察した100以上の施設の天井は，落下していたという。これは怖い。

東日本大震災では，天井落下が原因で人が亡くなり，国土交通省も動き始め，平成25年8月5日に「特定天井及び特定天井の構造耐力上安全な構造方法を定める件」が告示された。川口教授，法律で天井の耐震補強を強制するのは間違い，と手厳しい。許認可ビジネスのチャンスとばかりに，行政に取り入る輩もいると，教授の嘆きは続く。

弊誌が後援したセミナー「安全な天井設計と天井脱落対策技術基準早わかり」で，清家剛先生が詳しく説明されていたのを聞いて，なるほどと思う。

■耐震補強は鎧だ

天井が落ちたら人命はいかに……と，問い続けて20年。国側にもやっと，安全な天井を目指す動きが？

だけど，重い天井をやめて軽くしよう，という主張とは違うから喜べない。そもそも重力の問題なのに，地震の話に終始しているとはナンセンス。落下物で人が死なない，ということが大事なのではないですか！との強い口調には頷くばかり。非構造部材のことは構造設計者の責任の範囲外。基本的には意匠設計者が設計のときに関心を持ち，責任を持つべきなのです。

何を根拠にすればよいか？との問いには，ダミーヘッドに天井材を落下させて，衝撃を判定する実験を繰り返し，自動車事故の知見を研究に取り入れてもいるのだと，明快に答える。

仕上材の違いと天井高で，危険度がわかる日本建築学会の指針が，平成27年1月に出るという。広さを問わず，「重さ」と「高さ」による設計基準は，住宅クラスでも活かせそうに思う。

■川口家

構造家の川口衛先生が父ならば，イタシカタない。小学校低学年のとき，大阪万博で多忙の父とはほとんど会えない。そんな時，学校で父親の顔を描く授業があった。ところが，健一クンは，どうしても思い出せなかった，お父さんの顔が……。宿題にされて，母親に聞きながら描く幼い姿はウフフです。時折，「建築を見に行くぞ」と連れて行ってもくれる父。行き先は現場のみ。「建築を見るとは，現場で骨組を見ること」と覚えた。完成建物が建築と理解したのが，大学4年になってからとか。ビッグな構造家を父に持った勲章ですね。建築を生業にしたのは4人兄妹で唯一人。「飽きない仕事は他にない！」と，川口家長男の選択です。

今宵も，浅草の民謡酒場で高らかに唄う父子。